

医家合田家の歴史と蔵書

町泉寿郎¹⁾・小曾戸洋²⁾・天野陽介²⁾・花輪壽彦²⁾

¹⁾ 二松学舎大学

²⁾ 北里研究所東洋医学総合研究所

〔要旨〕 本稿にのべる合田家は江戸時代中期以降、越後高田藩榊原家の藩医を勤めた家系である。その家伝の古医書類が昨年北里研究所東洋医学総合研究所に譲渡されたのを機に、その家系を調査し、蔵書を整理した。本家は初代平蔵―二代忠蔵―三代昌順―四代洋庵―五代義宜―六代平―七代博と続き、当代喬氏に至る。分家の医師には進、朗氏がいる。譲渡を受けた蔵書は全一三八点、四五〇冊。うち医書類は一〇二点、二八三冊あった。これらは江戸末期から明治期にかけての、越後高田における医学水準を伝える格好の資料である。

キーワード——高田藩医、蘭方、合田洋庵、合田義宜、合田平

緒言

平成十六年八月十日、三鷹市下連雀の合田家から北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部に家伝の古医書類が搬送された。当主喬氏の叔父にあたる合田朗氏が、後述のとおり北里研究所の要職を歴任された縁で、我々の東洋医学総合研究所に譲渡の運びとなったものである。合田家は江戸時代中期以降、越後高田藩榊原家の藩医を勤め、明治以降も一族から医者輩出している。まず同家の歴史を、次にその蔵書を紹介する。

一、合田家の歴代

墓所および資料について

平成十六年八月二十日に合田喬氏に同行を願い、新潟県上越市寺町にある同家菩提寺の天崇寺・孝巖寺、および現在墓石の大部分がある金谷山墓地を調査した。

天崇寺は山号を極楽山という浄土宗の寺で、合田家歴代が菩提寺とした。しかしながら、同寺には合田家の墓石は一基も現存しない。住職の許可を得て、過去帳から合田家の記録のみを抄出した。

孝巖寺は曹洞宗で、合田家と同寺の関係は今ひとつ明確でないが、初代平蔵夫妻とその娘、および四代洋庵の墓、計二基が現存する。(写真1)。

金谷山には旧榊原藩士たちの墓が多く集まっており、合田家が墓石を天崇寺から移動した時期は明確でないが、現在、孝巖寺の二基以外の十五基が残



写真 1 孝巖寺墓所の初代平蔵夫妻(左)
・四代洋庵(右)の墓

る。苔生した墓石が多く、一部に文字の判読困難なものが混じる（写真 2）。

合田喬家の仏壇には、家系図（近代写）が残る。さらに「名家名士伝 第六十・六十一・六十二回 合田平君・進君¹⁾」と題する、新潟の地方新聞の記事とみられる切抜きが伝わっているが、信憑性に問題がある。

一方、上越市立高田図書館所蔵の藩政資料の研究が続けられており、近年、榊原家臣団に関する基礎資料が刊行された。²⁾

以上の資料をもとに作成した合田家歴代の略歴と家系は次のとおりである。

本家歴代

初代 合田平蔵（?～一七五二）

本国は伊予国合田と伝えられる。本姓は越智氏。通称は平蔵。兄の名は平兵衛。伊予を本国とし合田氏を名乗った医家は数人ある。吉益流古方と吉雄流を兼修し洋方内科の先駆者といわれる合田求吾（一七二三～七三）。杉山真伝流の鍼医で温知社にも参加した合田春悦（一八三二～一九一〇）など。しかしそれらとのかかわりは目下未詳である。

平蔵は昌平黌に学んだとされるが、『升堂記』³⁾に見る限り、合田姓は寛政十年（一七九八）十一月二十五日入門の讃岐国丸亀の合田保介がある

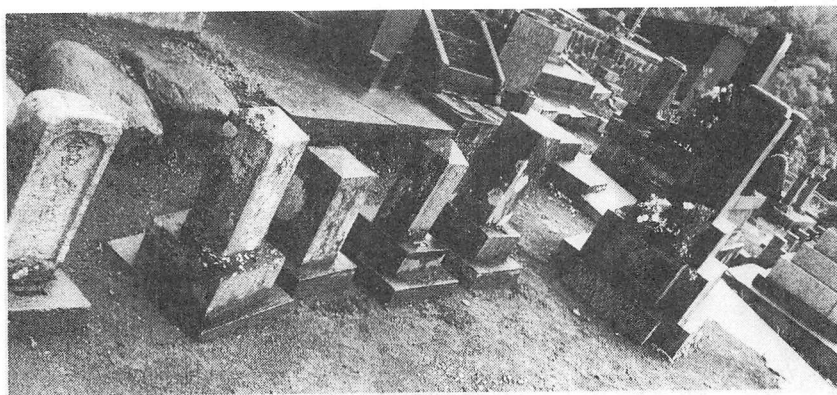


写真 2 金谷山墓地の歴代の墓

のみで、平蔵入贅の確証はない。榊原侯には姫路藩時代に侍講として仕えたらしい。時の藩主榊原政岑は不行跡のため隠居を命じられ、藩は姫路から高田へ転封となった（一七四二）。しかし襲封した幼主政永も「遠慮」を命じられて江戸に留め置かれ、高田初入国は宝暦三年（一七五三）というから、宝暦二年十二月二十七日に没した平蔵の没地が、江戸か高田かは未詳である。法号は覚法（一に学法・学沢）¹ 静心居士。妻は小野田氏、寛政四年（一七九二）九月二十七日没、法号は専譽妙心信女。嗣子は忠蔵義貴。女に観月涼栄童女（宝暦二年一七五二）五月十二日没）がある。

二代 合田忠蔵義貴（？～一七九六）

名は義貴。通称は忠蔵。半井典葉頭（幕府医官中、最高格の家柄）に従学し、高田藩医となった。医業従事は忠蔵からはじまると思しい。忠蔵が学んだ半井氏は、瑞英成明（一六七〇～一七四二）、瑞閏成庸（一六九三～一七五九）、成高（二七二一）のいずれかであろう。寛政八年（一七九六）十月十六日没、法号は想譽寂心信士。妻は真水氏、文化十二年（一八一五）十二月二日没、法号は上観貞昇信女。一男三女（妙讚信女へ寛政元年（一七八九）八月十四日没）・双子の智教童子 順貞童女へ寛政六年（一七九四）十二月十五日没）・岸唯称信女）あり、女に昌順義制（太田氏）を娶わせて養子とした。

三代 合田昌順義制（？～一八五五）

同藩士太田氏に生まれ、兄は太田六郎左エ門。名は義制。通称は昌順。合田氏を継ぎ高田藩医となった。分限帳に徴するに、合田家の記載は昌順が最初で、禄高は七人半扶持、専門は外科である（注2―②参照）。養父忠蔵は、半井家に学んでいる以上、本道（内科）と思しく、合田家における外科専攻は昌順から始まると見られる。

初婚合田氏との間に一男（洋庵義以）四女（妙夢童女へ文政十一年（一八二八）十月十四日没）・光吟童女（文政十三年（一八三〇）八月二十六日没）・玄光童女へ文化十四年（一八一七）正月十四日没）・月桂童女）があっ

た。ついで合田氏没後(文化十四年(一八一七)十二月十八日、到岸唯称信女)、木戸氏(慶応四年(一八六八)正月二十四日没、法誉静山意香信女)を娶り、その間にも二男二女(華妙童女(天保五年(一八三四)三月二十九日没)・惠遠童子(天保十一年(一八四〇)十月十四日没)・坂山童子・春雪童女)を儲けたが、嗣子洋庵義以のほかはいずれも早世した。安政二年(一八五五)正月十二日没、法号は念誉心光義制居士。

四代 合田洋庵義以(？～一八八六)

名は義以、一に賢。通称は洋庵。別号は通天楼・蘭蟹。高田藩医(外科)を継承した。高田城下の尾張町に住した(注2④参照)。妻は同藩士渋谷氏の出で、安政四年(一八五七)十二月十八日没、法号は清顔栄柳信女。三男一女(夏旭童子(天保十二年(一八四一)五月二十七日没)・知散童女(天保十四年(一八四三)六月十八日没)・了幻童子(弘化四年(一八四七)二月七日没)・知雲童子(通称寿々弥、嘉永二年(一八四九)二月十七日没)を儲けたが、いずれも早世したため、義宜(花井氏)を養嗣子とした。明治五年、文部省より種痘の免許を得た。明治十九年(一八八六)三月十八日没、法号は知足院賢誉三窮洋莽居士、孝巖寺に葬られた。

蘭方医学・洋学を好んだことは、洋庵と号したことや蔵書印「洋莽／蘭蟹」を使用したことから解る。収書に熱心で、現存する合田文庫の多くは、洋庵の代に購入したと見られる。

五代 合田義宜(一八四六～一九一一)

弘化三年に同藩士花井氏に生まれ、慶応中(一八六五～六七)合田家の養子となり高田藩医を継承した。名は義宜、一に直大。維新後、同地に医業を開業した。明治四十四年(一九一一)六月十五日に六十六歳で没した。法号は勇進院精誉義宜居士。

合田文庫のなかに、義宜の花井姓時代の写本・入婿後の写本が残されており、吉益流古方・蘭方医学・洋学研鑽のさまを伝えている。はじめ洋庵とも交わりのあつた高田藩医杉本文伯の家塾に学び、そこで小川文台(吉益復軒門

人、藩医)らと交わつたらしい。ほかに「拙修堂」なる塾で学んでおり、これは高田藩儒木村愚山の家塾と考えられる(愚山の男容斎の詩文集が文庫に残る。目録一〇八・一〇九)。

妻は同藩士山川氏の女トヲ(拾)子。嘉永二年(一八四九)に生まれ、昭和二年(一九二七)五月十日に七十九歳で没した。法号は慈心院拾誉妙円大姉。四男二女のうち、長女とくは旧同藩士族神岡健蔵に、二女しうは高橋氏に嫁し、二男弘は旧同藩士族内田氏の養子となった。長男平が家を継ぎ、三男進・四男亨(明治二十年生、東京外語大卒、東京に住む)は分家を立てた。

六代 合田平(一八七六〜一九三四)

明治九年(一八七六)七月に義宜の長男として高田に生まれ、高田中学・(東京)第一高等学校(医科、一八九八卒業)を経て、東京帝国大学医科大学卒業(一九〇二・〇三)。陸軍に入り、二等軍医・第十一師団付(〇四)、一等軍医・第二軍司令部付(〇五)、東京衛戍病院勤務(〇六)。病理学研究のため東京帝国大学医科大学大学院に学ぶ(〇七)。ついで満州独立守備隊付・奉天赤十字病院長(〇九)、三等軍医正(一一)、陸軍軍医学校教官(一五)、二等軍医正(一七)。この間、家督相続(一一)。近衛師団軍医部長、陸軍省医務局衛生課長、東京第一衛戍病院長などを経て、陸軍軍医監(二五)、陸軍軍医学校長(二八)、陸軍省医務局長に至つた。著書に『満州事変ニ於ケル陸軍衛生勤務ニ就テ』(一九三四)がある。森鷗外日記に名前が散見する。昭和九年(一九三四)十月二十四日、五十八歳で没した。

初婚の妻こう(幸)は、旧同藩士族村野高光の長女で、明治十三年(一八八〇)に生まれ、大正十一年(一九二二)二月三日、四十三歳で没した。法号は清徳院浄誉妙月大姉。平の九人の子(博・幻露孩児へ明治四十年(一九〇七)六月十二日没)・淳章孩児へ明治四十一年(一九〇八)九月二十八日没)・とき子へ明治四十二年(一九〇九)生、瀬戸氏に嫁す)・とし子へ明治四十四年(一九一一)生)・昇へ大正二年(一九一三)生)・保へ保誉愛

蓮童子、大正五年(一九一六)五月十九日没、二歳)・愛子(大正六年(一九一七)生)・久子(浄西女孩、大正八年(一九一九)十二月十三日没)は、みな村野氏こうの子である。

再婚の妻梅ノは姫宮智昭の妹で、明治十九年(一八八六)一月に生まれ、昭和四十三年(一九六八)十月二十一日、八十三歳で没した。法号は寂静院瑞誉梅香大姉。

七代 合田博(一九〇二〜七八)

六代平の長男として明治三十五年(一九〇二)九月十七日に生まれた。昭和五年(一九三〇)、慶応義塾大学法学部卒業。東京に住み、昭和五十三年(一九七八)十二月二十四日に七十六歳で没した。妻親枝は八雲龍震(島根の人)の三女で、明治四十五年(一九二二)に生まれ、平成十四年(二〇〇二)十月三十日に九十歳で没した。法号は普照院光誉慈親大姉。

八代(当代) 合田喬(一九三二〜)

七代博の長男に生まれた。二男に勲(昭和十年生)がある。

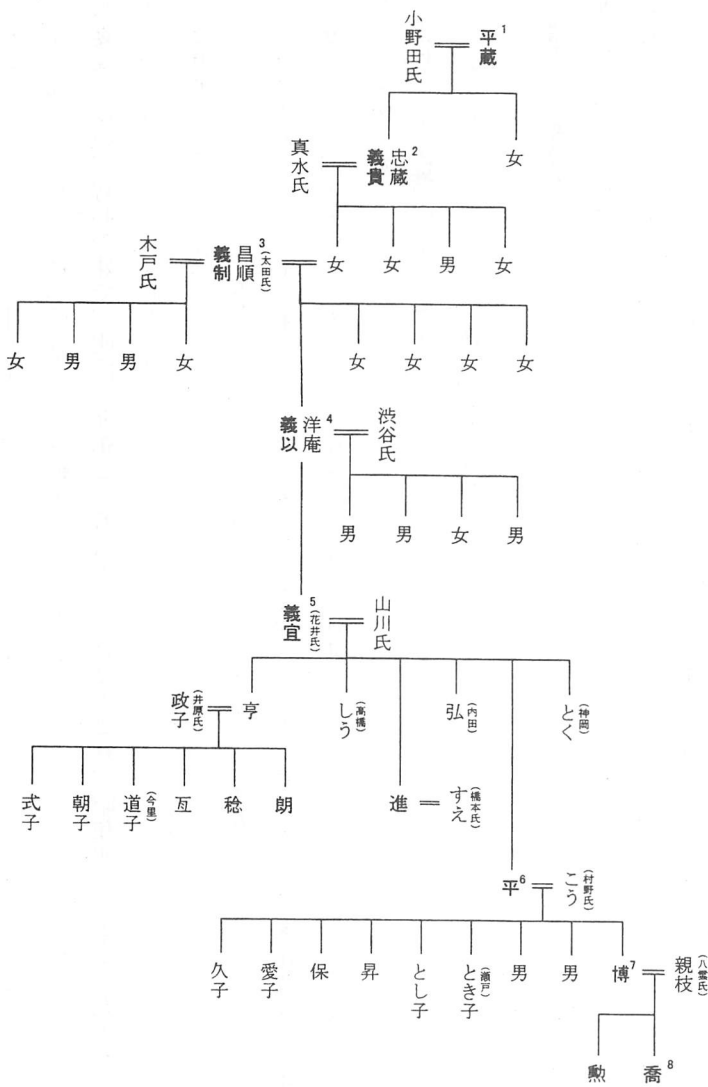
分家の諸氏(医者のみ)

合田進(一八八一〜一九二六)

五代義宜の三男として明治十四年に生まれた。千葉医専に入学(一九〇〇)、卒業(〇五)。小児科を専攻した。香川県大河郡立病院・名古屋生命保険会社等に奉職後、高田に帰郷して開業し、大正十五年(一九二六)三月三十一日、四十二歳で没した。法号は西岸院精誉勇進居士。妻すえ(橋本氏)は、昭和三十年一月十九日、満七十八歳で没した。

合田朗（一九一九）

五代義宜の四男亭（法岳院松譽亭寿居士、昭和五十一年三月十八日没、八十七歳）の長男。母は政子（井原糸太郎長女、明治二十六年（一九九三）生、昭和六十二年（一九八七）六月四日没、九十四歳）。朗の兄弟姉妹に道子



合田家の系図

(大正五年(一九一六)生)・朝子(大正二年(一九一三)生)・稔(大正三年(一九一四)十月二十七日生、大正四年三月二十二日没、清浄稔童子)・互(昭和二年(一九二七)九月十六日生、同年十二月十日没、互安善童子)・式子(昭和五年(一九三〇)生)がある。

慶應義塾大学医学部卒業後、北里研究所に入所(四二)。医博(五一)。北里大学創設時の微生物学第一講座主任教授を務め(一九六二)、その後、北里研究所理事・副所長、同大学衛生学部長を歴任した。

二、合田文庫の概要

古書類はすべて和装本。木製の書箱八函に納められていた。整理の結果、全一三八点、四五〇冊(帖も含む)。うち、医書類(『舎密開宗』を含む)は一〇二点、二八三冊。非医書類は三六点、一六七冊であった(写真3)。

医書類は和刻本が六〇点、清刊本が二点、写本が四〇点。和刻本は慶安二年(一六四九)刊の『察病指南』が最古、明治十四年(一八八一)刊の『育児須知』が最新。写本は幕末明治初期に集注している。概して丁寧な書写し、製本してある。内容的には伝統医学(漢方)系のものが、およそ五十八点、蘭方系



写真 3 合田文庫の全容

のものが四十四点と、伝統医学系のものが点数ではやや多いが、当時の医家としては蘭方色がきわめて濃厚といえよう。合田家（五代洋庵、六代義宜）が、積極的に蘭方を学び導入していた姿勢がうかがえる。専門領域としては、瘍科（外科・皮膚科）を得意としていたようである。

非医書類は、漢学の教養典籍もあるが、外国語をふくむ語学系のものが目立つ。

蔵書印は、①「合田蔵」②「合田（壺印）」③「故田賢印（陰刻）」④「医員故田賢（円印）」⑤「洋庵蘭齋」（以上三種が洋庵使用）、⑥「合田義宜」⑦「義宜書章」（以上二種は義宜使用）の七種を確認した（写真4）。

合田家は蔵書を大切に取扱い扱った。特に蘭方書は、書袋（販売時に付いている書物の「扉」を印刷した包み紙）を利用して、帙を作らせたものが多く、後年の虫損はあるものの、ほとんどが美本の状態である。

合田文庫は、江戸末期から明治期にかけての、越後高田における医学水準を伝える恰好の資料群といえる。¹⁾

三、合田文庫目録

医書類（五十音順）

- 一 「（東校）医院治験録」、明治五年刊、二卷二冊、卷二は写本
- 二 「育児須知」、橋本綱常撰、杉田由哲鈔訳、明治十四年刊、三卷三冊

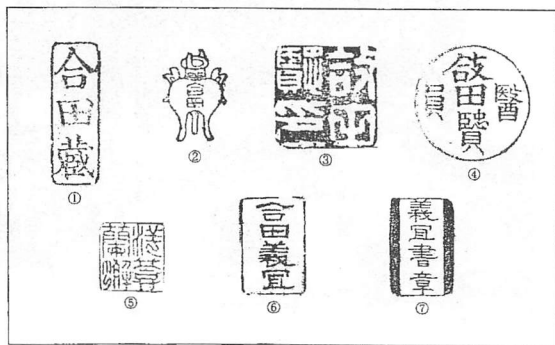


写真 4 合田文庫の蔵書印

- 三『医事古言』、〔吉益東洞著〕源信綱校、文化二年刊、一冊
- 四『医範提綱（西説医範提綱釈義）』、宇田川榛斎訳述、弘化二年刊、三卷三冊
- 五『医範提綱内象銅版図』、宇田川榛斎著、垂欧堂田善画、文化五年刊、一帖
- 六『医療正始』、独・昆斯骨夫著、伊東玄朴重訳、明治三年写、二一巻七冊、合田義宜写
- 七『瘟疫論標註』、明・吳有性著、黒弘休伯標註、享和二年刊、二巻二冊
- 八『和蘭医方纂要』、江馬元弘訳、文化十四年刊、四巻五冊
- 九『和蘭外科要方』、関口胤輯録、大崎博校正、杉田立卿閱、写、二巻一冊、一〇・一一・一二・一三・一六・三五・三九・五一・七七と同帙
- 一〇『和蘭外科要方』、関口胤輯録、大崎博校正、杉田立卿閱、天保二年刊、二巻一冊
- 一一『和蘭瘍医方範』、杉田立卿訳述、写、一冊、九と同帙
- 一二『和蘭瘍科大綱縛篇』、杉田立卿訳、写、一冊、九と同帙
- 一三『和蘭流膏藥煉法』、吉雄幸載家法、写、一冊、外題「紅毛流膏藥煉法」九と同帙
- 一四〔重訂〕解体新書、独・鳩盧模斯撰、杉田玄白訳、大槻玄沢重訂、文政九年刊、一三冊
- 一五〔重訂〕解体新書銅版全図、南寧一模、中伊三郎刻、刊、一帖、文政四年跋
- 一六『家伝婦人科』、一冊、安政二年、通天楼合田写、九と同帙
- 一七『家法難波骨継秘伝』、写、三巻一冊、九九と同帙
- 一八『眼科新書附録』、和蘭・布冷吉著、松田就輯録、杉田立卿閱、文化十三年刊、一冊
- 一九『丸散方』、〔吉益東洞著〕谷口信庵輯、文化六年刊、一冊
- 二〇『軍中外科書』、蘭・抱烏駝殷講述、一冊、慶応三年、合田義宜写

- 二一 『瘵狗傷考』、原南陽、天保七年刊、一冊、五八と同帙
- 二二 『経穴彙解』、原南陽、嘉永七年刊、八卷八冊
- 二三 『経穴纂要』、小阪元祐、文化七年刊、五卷五冊
- 二四 『外科上池秘録』、西川国華、享和二年刊、四卷一冊、四七と同帙
- 二五 (新刊) 『外科正宗』、明・陳実功纂著 荻野元凱校正、寛政三年刊、四卷四冊
- 二六 『外科総論』、蘭・抱烏駝殷講述、明治元年写、二卷二冊、合田義宜写
- 二七 『解毒奇効方』、原南陽、天保九年刊、一冊
- 二八 『広胖堂常用方府』、写、一冊、広胖堂日用方府
- 二九 『虎烈刺論』、石黒忠恵訳述、明治刊、一冊
- 三〇 『濟生三方附医戒』、独・扶歇蘭度著 杉田成卿訳、嘉永二年刊、三卷三冊附一冊
- 三一 『雜書』、写、一冊、四八・五一・五三・六八・七・八八・八九・九五と同帙
- 三二 『察病指南』、宋・施発、慶安二年刊、三卷一冊
- 三三 『産科発蒙』、片倉元周、刊、六卷四冊、医学質験義五種五〇・七一と同帙
- 三四 『七新薬』、司馬凌海、文久二年刊、三卷三冊
- 三五 『痔病』、写、独・扶歇蘭度著 杉田成卿訳、一冊、九と同帙
- 三六 『銃創預言』、大槻俊齋訳編、写、一冊
- 三七 『種痘新書』、清・張琰(遜玉) 編集、一一卷五冊、清・己卯(二八一九) 刊
- 三八 『春林軒蔵方拔萃』、写、一冊、外題「青州先生秘方」
- 三九 『春林軒蔵方拔萃』、一冊、嘉永七年、合田洋庵写、九と同帙

- 四〇『傷寒論』、漢・張仲景述 晋・王叔和撰次 浅野徽校、寛政九年刊、一〇卷三冊、外題「校正宋版傷寒論」
- 四一『(小刻) 傷寒論』、漢・張仲景、文政六年刊、一冊
- 四二『傷寒論』、漢・張仲景述 晋・王叔和撰次 浅野徽校、寛政九年刊、一〇卷三冊、外題「校正宋版傷寒論」
- 四三『傷寒論聞書』、吉益南涯、一冊、元治元年、花井直大寫
- 四四『傷寒論輯義』、多紀元簡、文政五年刊、七卷一〇冊
- 四五『傷寒論述義』、丹波元堅、写、五卷二冊
- 四六『傷寒論精義』、吉益南涯著、五卷二冊、花井直大寫
- 四七『上池秘録』、西川国華、享和三年、文政六年刊、四編四冊、二四と同帙
- 四八『診病奇核』、多紀元堅、写、二冊、三一と同帙
- 四九『西医略論』、英・合信著 清・管茂材撰、安政五年刊、三卷四冊
- 五〇『青囊瑣探』、片倉元周、刊、二卷二冊、医学質験義五種三三と同帙
- 五一『青囊秘録』、〔華岡青洲〕、写、一冊、三一と同帙
- 五二『濟美堂膏藥方』、写、一冊、九と同帙
- 五三『濟美堂方函』、〔竹中文輔〕、写、二冊、三一と同帙
- 五四『舍密開宗』、〔英・ヘンリー・ウィリアムズ〕 宇田川榕庵訳、刊、三卷三冊、内編
- 五五『生理発蒙』、蘭・李邈撰 島村鼎甫訳、慶応二年刊、一三卷・図式一卷一四冊
- 五六『製煉経験』、写、一冊、外題「製煉書」
- 五七『全体新論』、英・合信、清・陳修堂撰、安政四年刊、二卷二冊
- 五八『叢桂偶記』、原南陽、嘉永七年刊、二卷二冊、二一と同帙

- 五九『(鼈頭)素問玄機原病式』、岡本一抱、元禄三年刊、二卷二冊
六〇『泰西方鑑』、小森桃塙、文政十二年刊、五卷五冊
六一『空扶斯新論』、米・普林篤著、松山棟庵訳、写、二卷一冊
六二『中毒総論』、蘭・抱烏土殷口授、慶応四写、一冊、合田義宜写
六三『痘科鍵』、明・朱巽、武田叔安(校)、安永六年刊、二卷四冊
六四『導水瑣言』、和田東郭述和田哲記、一冊、安政元年、小川文台写
六五『吐方考』、永富独嘯庵、刊、一冊
六六『内科新説』、英・合信著管茂材撰、安政四年刊、三卷三冊
六七『難經本義』、元・滑寿、刊、二卷二冊
六八『微瘡經驗方』、写、一冊、三二と同帙
六九『微瘡新書』、塙・布連吉著杉田立卿訳、文政四年刊、五卷五冊
七〇『微瘡要録』、寺尾隆純・大江雲澤、写、二卷一冊、三二と同帙
七一『微癘新書』、片倉元周、天明六年刊、不分卷二冊、医学質験義五種三三と同帙
七二『秘方集』、写、一冊
七三『病学通論』、緒方洪庵、安政四年刊、三卷三冊
七四『病名彙解』、蘆川桂洲、寛政五年刊、七卷五冊
七五『病理内科書』、蘭・抱烏駝殷口授、四冊、慶應三年、合田義宜写
七六『婦嬰新説』、英・合信著清・管茂材撰、(江戸末)刊、二卷二冊
七七『不死疵療治之卷』、蘭・アルマンズ石嶋梅庵、写、一冊、九と同帙

七八『扶氏經驗遺訓』、独・扶歇蘭度著 緒方洪庵訳、安政四年刊、二帙二五卷一六冊、卷四第一、二編・卷八
第一、五編缺

七九『扶氏經驗遺訓藥方編附録』、独・扶歇蘭度著 緒方洪庵訳、安政四年刊、藥方編二卷合一冊 附録三卷合一冊

八〇『布列斯氏解剖書(元亨)』、蘭・滿私歇兒度、写、二卷二冊

八一『方苑』、平岡水走、文化八年刊、一冊

八二『方函』、写、一冊

八三『方極』、吉益東洞述 品丘明記、明和元年刊、一冊

八四『麻疹三書』、多紀元簡、刊、三書二冊

八五『麻疹精要』、清・張璐 上月專庵附方、寛政九年刊、一卷一冊

八六『脈学輯要』、丹波元簡、刊、三卷一冊

八七『脈論』、津田淳三、安政五年刊、一冊

八八『妙藥集』、写、一冊、三一と同帙

八九『藥性能毒』、写、一冊、妙藥集上卷三一と同帙

九〇『(蘭方内用)藥能識』、高良斎、刊、一冊

九一『藥品手引草』、加地井高茂、安永七年刊 天保十四年補刻、二卷二冊

九二『藥名早引(附録共)』、横井全柳編 小森愚堂閱、天保八年刊、正編二卷二冊 附録二卷一冊

全三冊、外題「泰西藥名草手引」

九三『熊胆真偽弁』、鈴木甘井著、写、一冊

- 九四『瘍医新書』、独・協乙速の盧著 杉田玄白 大槻玄沢訳、文政八年刊、三卷四冊
- 九五『瘍科瑣言』、華岡青洲、写、二冊、三一と同帙
- 九六『瘍科瑣言』、華岡青洲、写、一冊、一〇〇と同帙
- 九七『瘍科新選』、杉田立卿訳述、天保三年刊、四卷四冊 附録一冊
- 九八『瘍科秘録』、本間棗軒、弘化四年刊、一〇卷一二冊
- 九九『瘍科方筌』、華岡青洲、写、一冊、一七と同帙
- 一〇〇『瘍科方筌』、華岡青洲、写、一冊、九六と同帙
- 一〇一『要術知新』、独・協乙速の盧著 大槻玄幹訳述 大槻磐水閱、刊、三卷三冊
- 一〇二『養生法』、松本良順誌 山内豊城校補註、「明治前期」刊、不分卷二冊
- 一〇三『窠篤児薬性論』、蘭・窠篤児著 林洞海訳、安政三年刊、二一卷一八冊

非医書類（五十音順）

- 一〇四『英文典』、明治三年刊、一冊
- 一〇五『英文典直訳』、明治三年刊、二冊
- 一〇六『大岩山清秀公石碑銘写』、刊、一冊
- 一〇七『女四書』、嘉永七年刊、四卷四冊、清・王相
- 一〇八『觀旭軒遺稿』、木村容齋、明治二十四年刊、二卷二冊
- 一〇九『觀旭軒遺稿』、木村容齋、明治二十四年刊、二卷二冊
- 一一〇『近思録』、宋・朱熹 呂祖謙、安政三年刊、一四卷二冊

- 一一一 『經濟録』、太宰春台、写、一〇卷一〇冊
- 一一二 『語彙活語指掌』、明治二十年刊、一冊
- 一一三 『語彙別記』、明治十七年刊、二卷一冊
- 一一四 『孝経』、承応三年刊、一冊
- 一一五 『合類大節用集』、横島昭武、享保二年刊、一〇卷一三冊
- 一一六 『詩学小成』、千葉茂右衛門、寛政九年刊、四卷三冊、卷一缺
- 一一七 『史記評林』、寛政四年刊、一三〇卷五〇冊、首二卷三帙明・凌稚隆輯校李光縉增補
- 一一八 『詩経』、刊、二卷二冊
- 一一九 『詩稿』、〔合田義直〕、写、一冊
- 一二〇 『詩語碎金』、泉要編石作駒石校、天保刊、三卷一冊
- 一二一 『(立齋先生標題解註音釈) 十八史略(卷四・卷五)』、曾先之編陳殷音釈、刊、二卷二冊
- 一二二 『珠算二千題(上)』、尾関正求、明治二十一年刊、二卷一冊、上のみ
- 一二三 『春秋左氏伝校本』、明治十四年刊、三〇卷一五冊
- 一二四 『純正蒙求』、元・胡炳文、嘉永五年刊、三卷三冊
- 一二五 『小学句読集疏』、竹田定直 貝原篤信、明治十七年刊、一〇卷目錄一卷二冊
- 一二六 『諸国道中記』、刊、一冊
- 一二七 『数学三千題(下)』、尾関正求、明治二十一年刊、一卷一冊、下のみ
- 一二八 『(精註) 正文章軌範』、宋・謝枋得 石川鴻斎、刊、七卷三冊
- 一二九 『先哲叢談(卷三・八)』、原念齋、文化十三年刊、六卷三冊

- 一三〇『先哲叢談後編』、東条琴台、文政十二年刊、八卷四冊
- 一三一『大学章句新疏』、室鳩巢、天明六年刊、二卷一冊
- 一三二『大日本道中細見記』、友鳴松旭、刊、一帖
- 一三三『東京新繁盛記（初編）』、服部誠一、明治七年刊、一冊
- 一三四（標注）東萊博議（卷五）、呂祖謙撰 阪谷素標注訓点、刊、一卷一冊
- 一三五『日本外史』、頼山陽、明治十六年刊、一二卷一二冊
- 一三六『蛮語箋』、森羅万象一世著 箕作阮甫補、嘉永元年刊、二卷二冊、外題「改正増補蛮語箋」
- 一三七『孟子』、朱熹集注、明治十四年刊、一四卷四冊、外題「新刻校正孟子後藤点」
- 一三八『幼学詩韻』、成徳隣 檜長裕編、弘化二年刊、一冊
- 一三九『和歌梯』、富士谷成章、明治二十四年刊、不分卷二冊

注

(1) 記事内容の下限は大正六年であるので、この時期の発行と考えられる。

(2) 『上越市史 別編5・6』（上越市史編纂委員会、一九九二・二〇〇〇）として「藩政資料1・2」が刊行された。別に『上越市史叢書 No.5 史料集・高田の家臣団』（上越市史専門委員会近世史部会、二〇〇〇）として、松平光長家臣団の分限帳3種、榊原家臣団の分限帳七種が索引を付して翻刻・刊行された。榊原家臣団の分限帳七種の内訳は次の通り。

- ① 「榊原藩家臣禄高覚 文政十三年七月」
- ② 「榊原様内越後頸城郡高田御家中高分限帳 天保十五年一月」
- ③ 「高田分限帳 天保十五年一月」
- ④ 「江戸分限帳 天保十五年一月」

④ 「伊呂波分限帳 (嘉永期以降)」

⑤ 「高田役禄帳 文久二年」

⑥ 「江戸役禄帳 文久二年」

⑦ 「高田職員禄並家内職員録 明治三年」

右記資料に記載された、合田家の記事は次の通り。

② 一、七人半扶持内三人扶持 外科医師 太田六郎左エ門弟 合田昌順(一五三頁下)

③ 一七人扶持 合田洋莽(一八二頁下、翻刻は「莽」に作る)

④ 一、七人半扶持内老人無所務 尾張丁 合田洋庵(二二三頁上)

⑤ 一、米七人半扶持内老人無所務 合田洋莽(一八二頁下、翻刻は「莽」に作る)

③ 橋本昭彦他「升堂記」(東京大学史料編纂所蔵) 翻刻ならびに索引 一九九七。

④ 榊原家臣団の高田入府時期の問題にして、石原力氏から示教を得た。深甚の謝意を表す。

⑤ 惠遠童子は、合田家系図に三代義制と木戸氏の子とするのに従ったが、孝巖寺過去帳には洋庵の悖とする。

⑥ 「莽」は庵の別体。洋庵自身は多く「莽」を用いるが、本稿では通用字に従った。「蟹」は蟹に同じ。欧文の横書きを、

カニの横書きに擬えた号であろう。

⑦ 杉本文伯は内省子と称し、家塾を伐柯堂・柯堂と号した(合田文庫所蔵・嘉永七年へ「安政元年一八五四」合田洋庵筆

写「春林軒藏方拔萃」巻末の識語)。家禄二五〇石内五〇石無所務は、藩医中の最高禄である(注2 掲引書二四九頁上)。

⑧ 小川文台は天保十年(一八三九)生まれで、義宜より七歳年長。二十一歳(一八五九)に吉益復軒に入門している

(「日本医史学雑誌」四八一―二、二〇〇―二、町泉寿郎「吉益家門人録(四)」二五三頁)。合田文庫に、小川文台から義宜

(花井姓時代)に贈られたとみられる、安政元年(一八五四)小川文台筆写「導水瑣言」が残る。なお小川文台について、

蒲原宏氏より次のとおり示教を得た。深甚の謝意を表す。

「小川文台は、のちの杉本直形(一八三九―一九二四・四・三〇)。杉本内省の養子となる。高田藩士小川興助の四男。

吉益のあと、伊東貫斎につく(慶応三三)。ついで大学東校で学び、陸軍軍医。高田盲学校創立発起人の一人、二代校長。」

(9) 木村愚山、名は敏、通称は左次郎、字は遜志、別号は愚山・拙修。越後の人。明治三年没、六十八歳。井部香山・古賀侗庵門。高田藩儒(汲古書院『漢文学者総覧』一九七九)。「越後中頸城郡黒川村小野の人。木村容齋は愚山の子である。」(蒲原宏氏示教)。

(10) 内田弘(一八七七—一九〇四)は、高田中学を経て、海軍兵学校卒業後(二八九九)、佐世保鎮守府勤務。須磨分隊長心得(一九〇三)、中尉(〇四)に進んだが、日露戦争の旅順第三閉鎖のとき二十八歳で戦死(〇四)、大尉に昇叙された。法号、弘誓院進誓忠勇義道居士(東京美術『明治過去帳(新訂版)』一九九一、および合田喬家蔵の新聞切り抜き)。

(11) 『向陵駒場同窓会會員名簿』(昭和四十刊、向陵駒場同窓会)に名が載る。同書よれば、同窓四三人中、三八人が東京帝國大学医科に進学している。

(12) 『東京大学卒業生氏名録』(昭和二十五刊、東京大学)、「医学士 医学科」の「明治三十六年七月卒業(前年九月ヨリ此年三月迄ノ間ニ於テ卒業シタル者)」の項に、その名が見える。同氏名録は、大正九年卒業より以前は、卒業試験時の成績順に登載されており、平は九八人中、二三番目である。同級には永井潜(四番)・佐々木隆興(六番)・住田正雄(三〇番)らがある。平の卒業年を明治三十五年とも三十六年とも記す点につき、岡田靖雄氏より、この時期の東京帝國大学の実質卒業時期(十二月)と卒業式挙行時期(七月)のずれに起因するとの教示を得た。深甚の謝意を表する。

(13) 森鷗外日記に見る合田平の記事(岩波書店『鷗外全集』第三五巻、一九七五)は、つぎの通り。

- ① 明治四十三年二月二十三日「福嶋中将安正来て合田平の替人の事を言ふ。」
- ② 大正二年七月三十日「平井政適来訪す。桂公太郎鎌倉にありて、其病は胃癌なるものの如く、介護者を要す。故に合田平を借らんとするなり。合田に出発を命ず。」
- ③ 大正二年九月十日「合田平を伴ひて楠瀬大臣を訪ふ。関節儂麻質斯にて病臥せるなり。」
- ④ 大正五年二月三日「座間止水田中将義一を介して来見す。椿山公痢を患ふ。荒木栄三郎、合田平を遣りて宿直せしむ。」
- ⑤ 大正五年三月十日「辰野正男来話す。母上苦惱せさせ給ふと聞き、官衙より合田平を遣る。」
- ⑥ 大正九年二月二十日「参寮。合田平将之西洋。来告別。」

⑦ 大正十年三月七日「参館。正木直彦、合田平、山田孝雄、虫明盛光、安田友太郎、山田珠樹夫妻至。合田請子代鶴田禎次郎為脚氣首座。」

(14) 分限帳から合田家が江戸詰ではなかったことが知られ、また文庫資料も高田での修学の跡示すものが多い。

謝 辞

合田喬氏・朗氏をはじめとする合田家一族の皆様、および天崇寺・孝巖寺の方々の資料提供に対し、深甚の謝意を表します。

(※本稿は文部科学省科学研究費補助金特定領域研究A(2)「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究(江戸のモノづくり)」研究の一環である。)

The History and Library the Goda Family of Medical Doctors

Senjuro MACHI, Hiroshi KOSOTO, Yosuke AMANO and Toshihiko HANAWA

The Goda family discussed in this paper is a family lineage that served as the official physicians to the Sakakibara family that ruled Takada han in Echigo province from the middle of the Edo period.

Last year old medical materials and writings that had been transmitted by the family were transferred to the Oriental Medicine Research Center of the Kitasato Institute. The authors have had the opportunity to study the family genealogy and collate these archives.

The Goda family has continued through eight generations. These are, respectively, ① the founder Heizo ; ② Chuzo ; ③ Shojun ; ④ Yoan ; ⑤ Yoshinobu ; ⑥ Hitoshi ; ⑦ Hiroshi ; and ⑧ the present head, Takashi. We have identified two lines of physicians in collateral families (from Susumu and Akira, both sons of Yoshinobu).

The archive as received is comprised of 138 separate items from a total of 450 volumes. Of these, medical works constitute 102 items in 283 volumes. The library provides valuable material which sheds light on the standard of medicine in the Takada area of Echigo from the late Edo through the Meiji periods.